

タイトル：2011 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art

日時：2011年11月25日（金）14:30～19:50

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES), 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut  
Central District (Downtown Beirut)

Workings of power to the eyes of Cairene woman in her twenties in the eve of revolution

鳥山 純子（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

### 報告内容

報告会では、過去のフィールドワークにより得られたカイロ在住の20代女性教師のライフヒストリーをジェンダー視点から分析した知見を検討した。報告したのはスコット（Scott, J. 1985 *Weapons of the Weak*）による「抵抗」の議論を分析ツールとして用い発展した、中東における弱者をとりまく「権力（power）」という研究蓄積に依拠し、ナラティブというマイクロなデータに根差しながら現代のカイロに生きる女性をとりまく権力の諸相を明らかにすることを目指した議論である。

中東のジェンダー研究では、女性の生き方を考える上で、家父長制など家族関係がことのほか重視される傾向があり、ジェンダーを規定し、またその規定を再生産する組織として、家族には大きな注目が集められてきた。しかし自分の半生について語る教師として働く一人の20代女性のナラティブをライフヒストリーに編集したところ、彼女が「ザーラーン」な態度をとることで一貫して抵抗してきたのは、家族ではなく、自分に正しい情報を提供してこなかった社会であったこと、また家族はその抵抗において彼女に実際的な援助を提供する存在として認識されていたことが明らかになった。また彼女が抵抗を語る上で、女性としての側面以上に、学校教育の成功者という立場を強調していた点をもって、必ずしもジェンダーが常に先行する形で女性たちが自分を規定しているわけではないことを指摘した。こうした知見は、2011年1月に起こった「1月25日革命」と女性との関わりを考える上でも重要であると考えられる。

### ディスカッションの概要

コメンテーターの Sari Hanafi 氏（American University of Beirut）からは本報告が既存の中東ジェンダーに関する知見を再生産するものでなく、既存の研究に批判的な立場から具体的な事例を丁寧に分析するものであることが評価された。その一方、この分析をさらにすすめ、中東地域の現状を説明できるような「個人」の在り方に関する研究へ発展させる重要性について指摘を受けた。また本報告で焦点をあてた「ザーラーン（zaalan）」という表現の対象としての妥当性についても疑問が呈されたが、この点については報告者以上に、Hilal Khashan 氏（American University of Beirut）から、エジプトにおける「ザーラーン」とレバノンにおける「ザーラーン」の意味論的相違について補足説明がされた。

## 会議参加の感想

本報告会への参加は、報告者にとって、自分が行っている研究の位置づけと今後の方向性を考える上で、大きな刺激を受けた。

第一に、本報告会は普段接する機会の少ない異なる学問分野で中東を対象に研究する若手研究者と密度の濃い議論ができた貴重な機会であった。とりわけトップダウンに事象を研究する学問分野でも、ミクロで具体的な事例に根差した権力理論が援用されていることを知り、自分が目指しているボトムアップで現象学的手法を用いた研究と、よりマクロな視点での研究との具体的な往還の可能性を見ることができたことが意義深かった。

第二に、研究機関訪問として案内していただいた内戦博物館では、これまで書籍や教室の中で学んできた批判的まなざしが、展示や資料収集という形で具体的な活動に発展している姿を見ることができた。具体的なモノや個人とのつながりを再度確認させることを意識した展示や、記憶が権力によって占有されることへの抵抗を意識した資料収集の在り方は、自分が今後研究者としてなすべき社会への貢献を考える上で非常に参考になった。

報告の機会だけでなく、研究者としての今後の自分の進む方向を考えるチャンスを与えてくださった先生方、スタッフのみなさんには心からの謝辞を表したい。